

総称的名詞表現としてのthe NPに関する認知的分析

長谷部 陽一郎*

1. はじめに

一般に、ある名詞表現の指示対象が、外部世界に実在する特定の事物ではなく、あるクラスまたはカテゴリーに属する要素の全体あるいは代表であると考えられるとき、その名詞表現は総称的意味を表しているという。英語の場合、総称的意味は、下の(1)のように、いくつかの異なる形式の名詞句によって表される。

- (1) a. *The bull terrier makes an excellent watchdog.*
 b. *A bull terrier makes an excellent watchdog.*
 c. *Bull terriers make excellent watchdogs.*
 (Quirk et al. 1985 : 281)

(1a) から (1c) の3つの文の主語は、いずれも *bull terrier* という種類に属する犬の全体あるいは代表を指す名詞句であるが、それぞれ異なる形式を持っている。まず (1a) では、定冠詞によって導かれた可算名詞単数形が用いられている。次に (1b) では、不定冠詞によって導かれた可算名詞単数形が用いられている。そして最後の (1c) では、無冠詞の可算名詞複数形が用いられている。

本稿ではこのように様々な形式を持つ英語の総称的名詞表現のうち、(1a) の主語のように定冠詞 *the* によって導かれた総称的名詞表現についての考察を行う。*the NP* という形式を持つ総称的名詞表現の意味構造については、現在までに多くの研究者が分析を試みてきた。しかしその多くは、問題を必ずしも十分に説明するものでなかった。そこで本稿では、Ronald Langacker (1990, 1991, 1999) によって提唱された認知文法 (Cognitive Grammar) の理論的枠組みを用い、総称的意味

を表す *the NP* についての、より詳細で妥当な説明を試みる。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節では、総称的な意味を持つ *the NP* の特徴を、定冠詞の他の様々な用法との関係の中で位置付けるとともに、主要な先行研究における定冠詞の理論について概観し、認知的視点を持たない方法論によっては定冠詞の意味について十分な説明が行えないことを論じる。次に3節では、総称的意味を持つ *the NP* に対する認知的分析を展開する。ここでは、定冠詞というものに対して、また名詞句の総称的意味というものに対して、認知文法においてどのような定義が与えられているかを確認し、それに基づいた、総称的 *the NP* の概念構造の規定を試みる。加えて、*the NP* が総称的意味を表すことが可能であるためには、対象要素が比較的均質的なものとして認識され得るものでなければならないという仮説を提示する。

2. *the* の用法の分類と先行研究

この節では、英語定冠詞 *the* に導かれた名詞句の総称的意味について、予備的な考察を行う。まず、定冠詞の様々な用法の伝統的な分類の中で、総称的意味を表す用法がどのように位置付けられるかをみる。次に、定冠詞の意味に関するいくつかの主要な先行研究における理論を概観する。最後に、それらの理論の問題点を挙げ、定冠詞と総称的意味との関係の十分な説明のためには、認知的な観点からの分析が不可欠であることを論じる。

2.1. 定冠詞の用法の分類

the の様々な用法に関しては、従来、Halliday and Hasan (1976) によって示された分類が、一つの基本となってきた (Quirk et al. 1985 ; Lyons

*短期大学部 講師

1999)。Halliday and Hasanは、theには具体的内容と呼べるものではなく、問題となる要素を同定するための情報が何らかの形で聞き手にとって利用可能であると示すことに、この語の意味があるとした。そして、そのような情報がテキストのどこに見出されるかに基づいてtheの用法を分類することを提案した(Halliday and Hasan 1976 : 74)。以下、Halliday and Hasanによるtheの用法の分類を概観し、その中で総称的意味を持ったthe NPがどのように位置付けられるかについて考察する。

2.1.1. 言語内照応

Halliday and Hasanの分類では、theは言語内照応(endophoric)と外界照応(exophoric)とに大きく分けられる。the NPによって指し示される対象を同定するための情報が、談話やテキストの内部に見出されるとき、そのtheの用法は言語内照応であるという。一方、そのような情報が言語的には示されておらず、状況や談話参加者の既存知識の中に求める必要があるとき、そのtheの用法は外界照応であるという。まずは、言語内照応についてみてみよう。

言語内照応は、the NPの指示対象が、先行する談話やテキストの中で言及されているか、あるいはそれに後続する談話やテキストの中で言及されているかによって、前方照応(anaphoric)と後方照応(cataphoric)とに分類される。次の(2)は前方照応の例である。

- (2) Felicity bought a TV and a video recorder,
but he returned *the video recorder*
because it was defective.
(Quirk et al. 1985 : 267)

ここで、名詞句the video recorderは、同じ文の中ですでに言及されている対象への指示を行っており、典型的な前方照応の表現であると言える。しかし、次の(3)において確認できるように、先行詞は同一の文の中に現れるとは限らず、また、同一話者の発話中に現れるとも限らない。

- (3) A : An old man, two women and several

children were already there when I arrived.

- B : Did you recognize *the old man*?
(Lyons 1999 : 4)

また、先行詞はtheと結合する名詞と同じ名詞によって構成されている必要もない。先行する談話やテキスト内の表現に基づく推論によって対象要素が容易に想起できる場合、明示的な対応関係がなくともthe NPを使用することは可能である。

- (4) a. John bought a bicycle, but when he rode it one of *the wheels* came off.
(Quirk et al. 1985 : 267)
b. They've just got in from New York. *The plane* was five hours late.
(Lyons 1999 : 3)

(4a)において、名詞句the wheelsが、先行詞であるa bicycleが表す対象の構成要素であることは、誰にとっても容易に想起可能な事実である。また(4b)においても、the planeという名詞句によって表される要素は、明示的な先行詞こそ持たないものの、直前の文の内容に基づいて容易に想起できる対象を表している。

次に後方照応とは、名詞句の指示対象を特定化する要素が定冠詞よりも後に現れる場合の照応関係である。通常、後方から名詞句の指示対象を特定化する要素は、その名詞句に対する修飾句として現れる。次の(5)はそのような後方照応の典型的な例である。

- (5) a. *The president of Mexico* is to visit China. (Quirk et al. 1985 : 268)
b. What did you do *the camera I lent you*?

(5a)のthe presidentは、of Mexicoという句による修飾を受けることによって特定化されている。また、(5b)のthe cameraは、I lent youという節による修飾を受けることにより特定化されている。

このように、the NPが指し示す対象を同定するための情報を、談話やテキストの内部に見出すこ

とができるとき、その照応関係を言語内照応という。次に、the NPによって指示される対象を同定するための情報が、談話やテキストの内部に直接示されていない場合、すなわち外界照応についてみていく。

2.1.2. 外界照応

外界照応とは、表現の指示対象を特定するための情報が、談話やテキストの外に求められるときの照応関係である。そのような情報は、進行中の談話を取り巻く状況の中に存在している場合と、話者および聞き手が持つ一般的知識の中に存在している場合とがある。そこで、外界照応は、状況依存型 (situational) と知識依存型 (homophoric) という2つの下位カテゴリーに分けられる。次の(6)と(7)はそれぞれ状況依存型と知識依存型のthe NPの例である。

(6) *The roses are very beautiful.* [said in a garden] (Quirk et al. 1985: 266)

(7) I hear *the prime minister* behaved outrageously again today. (Lyons 1999: 3)

状況依存型である(6)のthe rosesは、談話の直接的環境の中で視覚的に認識される対象を指示している。一方、知識依存型である(7)のthe prime ministerは、社会の中で共有されている基本的な知識を前提にした指示表現である。

これら2種類のtheによる照応のうち、知識依存型照応については、さらに細かく分類することができる。対象の特定化のためにこの種の照応において求められる一般的知識には、実に様々な性質のものが存在するからである。例えば、上の(7)において求められる知識は、社会常識のようなものであるが、次の(8)では、通常、どのような状況であろうとも唯一的存在する対象に関する知識に基づく指示がなされている。

(8) *The sun* is now high in the southern sky.

ここで本稿の主題である、総称的意味を持ったthe NPが、上の分類においてどのように位置づけ

られるか、考えてみたい。次の(9a)および(9b)は、総称的意味を持ったthe NPの例である。((9a)は非総称的な名詞句としての読みも可能であるが、ここでは総称的な名詞句であるとみなす。)

(9) a. My sister goes to *the theatre* every month. (Quirk et al. 1985: 269)

b. *The tiger* is in danger of becoming extinct.

(9a)のthe theatreは、具体的に特定化された要素としてではなく、theatreというカテゴリーに属する施設をひとつの概念として表したものである。また、(9b)のthe tigerは、特定の個体ではなく、種全体をひとつの概念として表したものである。これらのthe NPが指示する対象を同定するための情報が求められる先は、先行する談話でも、発話を取り巻く直接的状況でもなく、あくまで話者と聞き手という談話参加者が当然持っている期待される一般的知識である。したがって、総称的意味を持ったthe NPは、theの用法の伝統的な分類において、外界照応の下位カテゴリーである知識依存型照応に属する用法として位置付けられる。

2.2. 定冠詞の中心的意味に関する先行研究

2.1では、定冠詞の様々な用法の伝統的な分類を概観し、その中で総称的意味を持つthe NPを位置付ける試みを行った。このように様々な用法を持つtheという語の中心的な意味は何かという問題について、これまで多くの研究が行われてきた。しかしながら、定冠詞の意味の本質は、未だ十分に捉えきれているとは言えず、必然的にthe NPの総称的意味についても完全な説明は与えられていない。そのような状況をふまえ、ここでは、主要な先行研究において示されてきた定冠詞に関する理論を概観し、その問題点を明らかにするとともに、定冠詞の意味の問題に対する認知的な分析の必要性を論じていく。

2.2.1. 親近性

Christophersen (1939) 以来、英語定冠詞 the

の意味は基本的に「親近性」(familiarity)という概念に集約されるという考え方が多くの研究者に共有されてきた(Heim 1982; Lyons 1999)。この考え方によると、the NPという形式を持った名詞句によって表されるのは、話者と聞き手の両者にとって既知の概念に限られる。

事実、定冠詞の用法の多くは、親近性によって説明される。その代表的なものが、前方照応や知識依存型照応の用法である。前方照応の場合、指示の対象となる要素は先行する談話の中ですでに導入されている要素であり、the NPが発話されたとき、その対象要素は必然的に既知のものとなっている。知識依存型照応の場合、指示の対象となる要素は、先行する談話の中で述べられずとも、談話参加者がすでに持っている知識の一部である。これらの場合においてthe NPという形式による表現が可能になることは、親近性の観点から自然に説明できる。

しかしながら、親近性の概念に基づく方法論を用いて、後方照応や状況依存型の照応におけるthe NPに対する説明を行うことは難しい。下の(10)(11)はそれぞれ、定冠詞の後方照応の例と、状況依存型照応の例である。

(10) We must accept *the possibility* that we might be wrong.

(11) [To warn an unsuspecting hiker of imminent danger]

Watch out for *the snake* behind you!
(Langacker 1991: 100)

(10)のthe possibilityが指す対象概念は、通常、聞き手にとって既知の要素ではない。また、(11)でも同様に、名詞句the snakeの指示する対象は、聞き手にとって既知の要素でない。むしろ(11)の場合は、the snakeが聞き手にとって既知の要素でないからこそ、この発話自体が語用論的に意味あるものとなると言える。

2.2.2. 唯一的同定可能性

親近性による定冠詞の分析には上のような問題点が存在するために、現在では、定冠詞の中心的

な意味を、親近性ではなく、「唯一的同定可能性」(unique identification)という概念を用いて説明することが行われている。唯一的同定可能性の概念を用いた研究に共通している考え方は、定冠詞の役割は、文脈において唯一的な存在である対象を同定するための情報が、何らかの手段によって聞き手にとって利用可能であることを示す点にある、というものである(Halliday and Hasan 1976; Hawkins 1978; Du Bois 1980; Kadmon 1990; Abbott 2001; Gundel et al. 2001)。

親近性によって説明できるtheの用法は、基本的に、唯一的同定可能性によっても説明できる。なぜなら、ある要素の親近性が高いということは、主体がその要素について認知的に際立った心的経験を有しているということであり、ある要素について認知的に際立った心的経験を有しているということは、必然的に、その要素を唯一的に同定できることを意味するからである。

唯一的同定可能性の観点からみれば、上の(10)(11)のように親近性の観点からは説明できない用法にも説明を与えることができるようになる。(10)のthe possibilityは、後続する修飾句による限定のおかげで、唯一的な対象として同定されることが可能であり、それゆえthe NPの形式を持つことができる。(11)のthe snakeは、修飾句による限定は受けていないが、発話の状況から、唯一的な対象として同定されることが十分可能であり、それゆえthe NPの形式を持つことができる。

2.2.3. 包含性

唯一的同定可能性は広範な用例の説明を可能にするが、定冠詞theの特徴をより正確に捉えるためには、それに加えて「包含性」(inclusiveness)の概念を考慮に入れるべきだという主張がある(Hawkins 1978)。the NPの意味が持つ包含性は、次の(12)のように、theが可算名詞複数形や物質名詞と結びつくとき、特に顕著なものとして現れる。

(12) a. It took a whole day to get *the computers* running again.

b. John drained *the oil* from the engine.

(12a) のthe computersと (12b) のthe oilは
いずれも、それぞれの文脈において、theと結合
する名詞自体（すなわちcomputersとoil）が包含
し得る要素の最大集合を指示している。したがっ
て、(12a) と (12b) のthe NPはそれぞれ、all
the computers, all the oilと言い換えることが可
能である。

包含性と唯一的同定可能性とは、必ずしも異な
る概念ではない。定冠詞が持つ同一の性質の異な
る側面と考えることもできる。内部的には多様で
あり得る要素集合を全体として捉えるということ
は、それを唯一的な要素として同定することに他
ならない。事実、(12a) のthe computersは、
個々のcomputerを構成要素として持つ集合の全
体をひとつの概念としてみなした表現だとすれ
ば、唯一的同定可能性の観点からも説明できる。
また(12b) のthe oilも、問題となるoilの全体を
ひとつの概念要素としてみなした表現だとすれ
ば、唯一的同定可能性の観点から説明することが
できる。

このように、包含性と唯一的同定可能性とが互
いに関係付けられるということは、これらの概念
を用いることによって多様な定冠詞の用法を統一
的に説明できる可能性を示唆している。このこと
は、包含性と唯一的同定可能性の概念を用いた理
論の基本的な正しさを裏付けていると言えるかも
しれない。しかし、実際には、それだけで定冠詞
のすべての用法に対する完全な説明を与えること
はできない。次の2. 3では、以上みてきた先行
理論に共通する根本的な問題点について論じる。

2. 3. 先行研究の問題点

従来の定冠詞分析における最大の問題点は、
the NPによって指示される対象の抽象性（およ
び具体性）についての認知的な理論基盤が確立さ
れていなかったことである。同じ形式の名詞句で
も、その意味は場合によって様々な抽象性を持つ。
このことを、多くの理論では適切に説明できない。
近年いくつかの研究において指摘されているよう
に、次の(13)のような定冠詞の総称的用法は、
親近性、唯一的同定可能性、包含性のいずれによ
っても説明することが難しい（Birner and Ward

1994; Lyons 1999）。

- (13) [Hotel employee to guest, in a lobby with
four elevators]
You're in Room 611. Take *the elevator* to
the sixth floor and turn left.

Birner and Ward (1994) で提示されたこの文
の発話の場面には、それぞれが唯一的に同定され
得る4つのエレベータが存在している。しかし、
話者は聞き手にそのうちの特定のどれかを使用す
るべきと指示しているわけではない。また、これ
ら4つのエレベータすべてを使用することを指示
しているわけでもない。したがって、ここでの
the NPの使用を唯一的同定可能性や包含性で説
明することはできない。(13)におけるthe
elevatorという名詞句の使用の背景には、対象が、
具体的で個別的なインスタンスとしてではなく、
抽象的なタイプ概念として捉えられているという
事実がある。つまり、ここでのthe elevatorは、
4台のエレベータそれぞれ自体に対して直接的に言
及する表現なのではなく、一般的な建物における
ひとつの移動手段としてのエレベータという概念に
対する言語表現なのである。

従来の研究においては、表現の対象の具体性・
抽象性に関して体系的な枠組みに基づいた論を展
開することが困難であった。談話参与者の多様な
事態認識に対する認知的な視点を持ちあわせてい
なかつたからである。ところが(13)にみられる
ようなthe NPによる総称表現は、具体的・個別
的な対象ではなく、より抽象的な概念について叙
述する言語表現であり、そのような対象の分析の
ためには必然的に認知的な視点が求められる。

以下では、認知文法を用いて、the NP形式の総
称的名詞表現に対する分析を試みる。Langacker
が提唱した認知文法では、言語を基本的認知能力
に基づく体系とみなし、言語使用に伴う認知活動
において概念の具体性・抽象性の度合いが決定さ
れるプロセスに光を当てている。このような枠組
みを用いることによって、総称的意味を持つthe
NPの構造をより精密に記述することができるよ
うになる。

3. 認知文法による分析

本節では、認知文法の枠組みを用いてthe NPの総称的意味を分析していく。定冠詞の基本的意味と名詞表現の総称的意味の本質については、すでにLangacker (1991)において、詳しい考察がなされている。¹しかし、theと名詞句が結びついて形成されたthe NP形式の表現が総称的意味を持つことについては、十分に論じられているとは言えない。そこで、認知文法の理論的道具立てを用い、the NPという形式を用いた総称的名詞表現の概念構造の規定を試みることに、大きな意義があると思われる。

以下、次のように論を進めてゆく。まず、3.1で、認知文法における定冠詞という文法カテゴリーの定義を確認する。次に3.2で、総称的な意味を持つ名詞表現の認知的定義を確認する。3.3では、the NPが総称的意味を持つ際の概念構造を認知文法の枠組みを用いて形式化する。最後に3.4では、the NPの形式が総称的意味を持つことができるための条件について考察する。

3.1. 定冠詞の認知的特徴

認知文法では、定冠詞theを、不定冠詞a、指示詞this/that、数量詞some/anyなどと同様、グラウンディング叙述詞 (grounding predication) というカテゴリーに属する語としている。グラウンディング叙述詞とは、言語化の対象となる (プロファイルを受ける) 要素を、ある種の参照点に関係付ける役割を果たす種類の語を意味する。これらグラウンディング叙述詞の中で、some/anyなどは、基本的に、数量に関する特定化を行うために、より包括的な基準体 (reference mass) の概念を参照点として、それとの関係において対象要素の位置付けを行う。一方、the/a/this/thatなどは、定・不定性あるいは近接性に関する特定化を行うために、談話参与者 (話者と聞き手) を参照点とし、それらとの関係において対象要素を位置付ける役割を果たす (Langacker 1991: 89)。

Langackerは、グラウンディング叙述詞のひとつである定冠詞が名詞句とともに使用されるとき、その表現の意味は次のような特徴を持つと論じている。第一に、名詞句によってTというタイ

プのインスタンスとして指定された要素 t_i は、現在の談話空間との関係において唯一かつ最大となる。第二に、話者は t_i に対する心的接触をすでに確立させている。そして第三に、聞き手は t_i に対する心的接触をすでに確立させているか、あるいは名詞句自体の働きにより新たにそれを確立させることができる (Langacker 1991: 98)。

前節で論じた親近性、唯一的同定可能性、包含性の各概念はすべて、Langackerによる上の記述の中に取り込まれている。まず、「インスタンス要素 t_i は現在の談話空間において唯一かつ最大となる」という記述は、theの唯一的同定可能性と包含性について述べていると解釈できる。また、「話者は t_i に対する心的接触を確立させており、聞き手のほうは、 t_i に対する心的接触を確立させているか、あるいは名詞句自体の働きによりそれを確立させることができる」という記述は、theの親近性と唯一的同定可能性について述べていると解釈できる。

しかし、認知文法による分析が有効であるのは、それに先立つ研究の成果を網羅的に取り込んでいるから、というだけではない。認知文法が先行研究における理論と決定的に異なるのは、認知文法では言語形式によって表現される対象をすべて心的で主観的な存在のモードを持った「概念」として捉えるという点にある。このような認知文法において、名詞表現の総称的な意味には、いかなる定義が与えられているのか。このことについて、次の3.2で考察する。

3.2. 総称的名詞表現の認知的特徴

ここでは、次のように議論を進めてゆく。まず3.2.1では、タイプ階層という理論的概念についてその定義を確認する。タイプ階層とは、認知文法において、あらゆる名詞句の概念構造の一部に存在するものとして規定されている概念であり、名詞句の総称的意味について論じるためには、この概念の導入が不可欠である。次に3.2.2では、名詞句が総称性を持つための構造的条件について論じる。the NPによる総称表現は、この条件を満たすことによって可能になる。そして、3.2.3では、可算名詞と物質名詞という2種類の

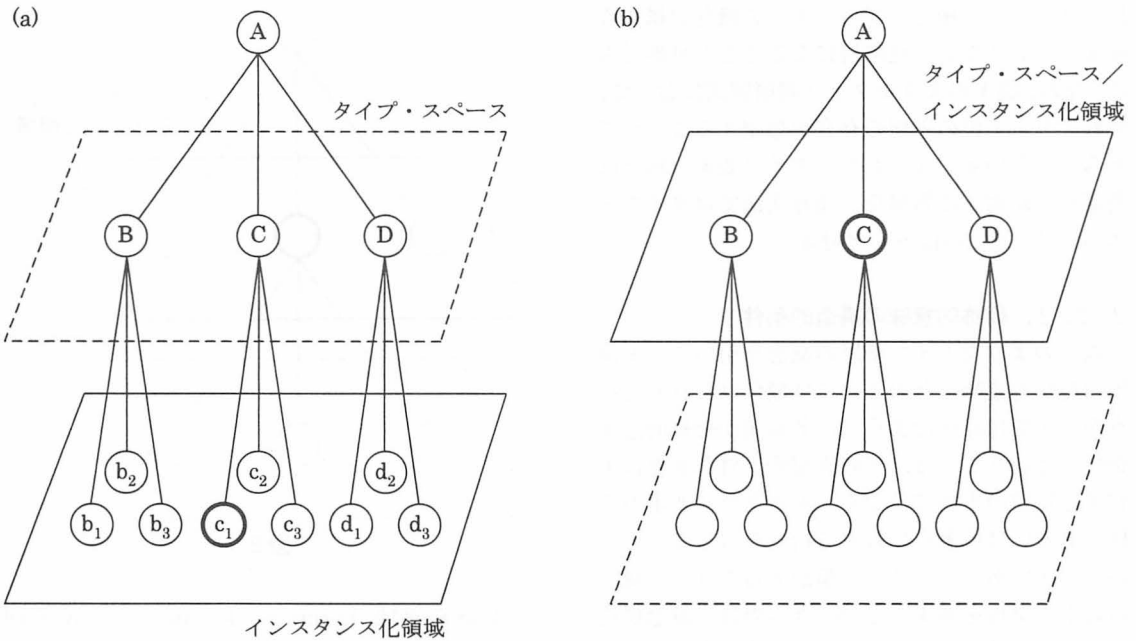


図1 (Langacker 1991 : 63を一部改変)

名詞が持っている概念的特徴と総称的意味との関係について論じる。

3.2.1. タイプ階層

認知文法では、あらゆるモノ的 (thing) 概念の意味は、タイプ階層 (type hierarchy) に基づいて決定されるとしている。タイプ階層は複数の階層から成る構造体で、概念の具体性・抽象性の度合いを決定する。タイプ階層の上位の階層に属する要素は抽象的な性質を持ち、より下位の階層に属する要素は具体的な性質を持つ。名詞句の意味の重要な部分が、このタイプ階層においていずれの階層がインスタンス化領域となるかによって決定される。インスタンス化領域として選択された階層に属する特定のインスタンス要素こそが、その名詞句によってプロファイルされる要素となるからである。なお、ここで用いている「インスタンス」という語には、その要素が空間的な具体性・個別性を持った要素であるという含意はない。ある階層において、他の同種の要素から区別され取り上げられる要素を、実際にその要素が持っている具体性や個別性にかかわらず、インスタ

ンスと呼ぶ。

Langacker (1991) では、名詞句のタイプ階層のスキーマ的構造を図1のような図式を用いて示している。図(1a)は、高い具体性・個別性を持った要素を表す名詞句の概念構造を構成するタイプ階層図式である。例として、ここでは、プロファイルされた要素 c_1 がジョンという名の特定の犬を表しているとしよう。するとジョンは犬というタイプのインスタンスであるから、ひとつ上の階層に属する要素Cを「犬」の概念を表す要素とみなすことができる。さらに、種としての犬の概念を表す要素であるCは、哺乳動物というタイプのインスタンスであるから、さらにひとつ上の階層に属する要素Aを「哺乳動物」の概念を表す要素とみなすことができる。²

ここでは、「ジョン」という名で呼ばれる特定の犬を表す要素 c_1 がプロファイルされており、その際、インスタンス化領域となるのは、 c_1 が属する最下位の階層である。しかし、実際にはあらゆる度合いの具体性・抽象性を持った階層がインスタンス化領域となり得る。例えば、(図1b)で示されるように、特定の犬であるジョンよりも

抽象性が高い、種としての「犬」の概念の属する階層がインスタンス化階層になることも可能である。なお、図1のようなタイプ階層図式において、それよりも下位の階層の存在を想定することができるような階層、すなわち、タイプ要素（例えば要素C）が属する階層を、認知文法ではタイプ・スペース（type space）と呼ぶ。

3. 2. 2. 総称的意味の構造的条件

以上のようなタイプ階層の概念を用いて、名詞句の総称的意味はどのように特徴付けられるだろうか。すでに述べたように、名詞句が総称的意味を持つということは、その表現が、外部世界に実在する特定の事物ではなく、あるクラス要素の全体（あるいは代表）に対する指示を行っているということである。では、表現があるクラスに属する要素の全体を表すことができるのは、概念構造におけるタイプ階層がどのように構成されるべきなのだろうか。

下位階層（およびそこに属する要素）を持ち得る、相対的に上位の階層がインスタンス化領域となること、名詞表現が総称的意味を持つための構造的条件であると考えられる。あらゆる名詞表現の概念構造では、タイプ階層を構成する複数の階層のうちのいずれかがインスタンス化領域として選択される。そしてそれによって、意味の抽象性・具体性が決定される。タイプ階層の最下位層の要素がプロファイルされる時、その名詞句は総称的表現とはなり得ない。一方、より高い階層に属する要素は、下位の階層に属する要素の上位概念として、それらの要素全体を表すことができる。そのような、自身より下位の階層（およびそこに属する要素）を持っている、比較的高い階層に属する要素をプロファイルするというのが、名詞表現が総称的意味を持つための構造的条件となる。つまり、図2のような概念構造が形成されるとき、名詞句は総称的意味を持つことができる。

3. 2. 3. 可算名詞と物質名詞

次に、可算名詞と物質名詞という異なる2つのカテゴリーに属する名詞の概念構造と総称的意味との関係について考える。両者の本質的な違いは、

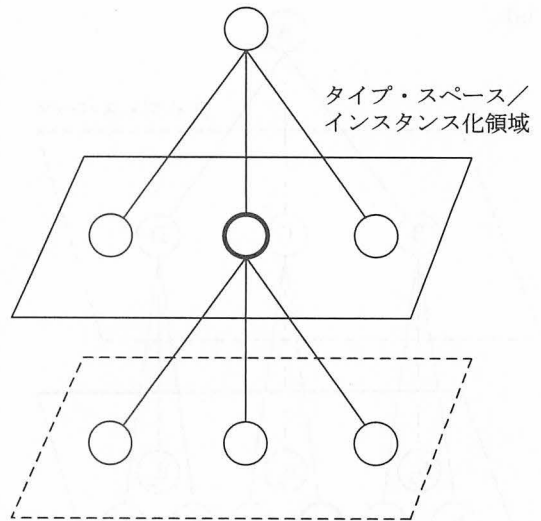


図2

主要認知領域（primary domain）の叙述範囲（scope of predication）の中で区分化されているか否かという点にある（Langacker1990：69）。ここで、主要認知領域とは、その表現によって表される対象のインスタンスが属する認知領域を意味する。多くの名詞句によって表される対象のインスタンスは、何らかの形で具体的な実質を持った要素であり、それゆえ空間的・時間的認知領域といった比較的下位の領域がデフォルトの主要認知領域となりやすい。これらの認知領域上で区分を受ける要素は可算名詞として表現され、区分を受けることができない要素は物質名詞（不可算名詞）となる。

可算名詞と物質名詞の概念構造の違いについて、もう少し詳しくみておきたい。両者の違いは、可能性として存在するインスタンスが他のインスタンスと区別されるような区分化を受けるか、それとも、いかなる境界線によっても全く区分化されない連続体として存在するかという点にある。可算名詞と物質名詞のスキーマの構造を図式化すると次の図3のようになる。（ここでは図式の簡素化のため、Tというラベルが与えられたタイプ要素より上位の階層とそれに属する要素の存在は考慮に入れていない。）

可算名詞と物質名詞がそれぞれこのような概念構造を持っているとすれば、総称的な用法におい

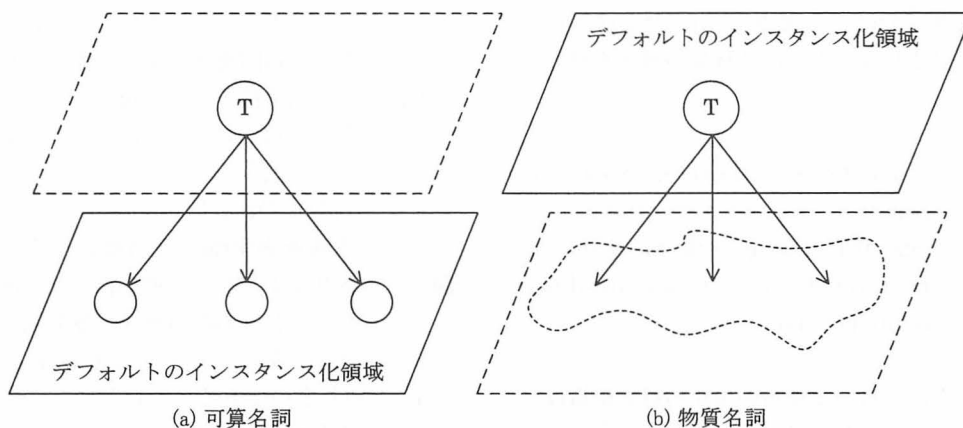


図 3

て使用されるための必要条件は両者ともに満たしていると言える。なぜなら、名詞表現が総称的意味を持つための条件は、3.2.2で確認したように、それ自身より下位の階層（およびそこに属する要素）を持っている階層がインスタンス化領域となることだからである。

しかしながら、可算名詞を無冠詞の単数形のまま総称的名詞句として使用することはできない。これは、名詞句というものが、ある単一概念要素を指示するものでなければならないということと関係している。可算名詞は、空間的・時間的領域において区分化を受ける強い傾向を持つために、指示対象となる単一概念要素を数量的に特定化しつつプロファイルすることがデフォルトとなっている。³ そのため、無冠詞の可算名詞単数形それ自体はタイプ概念を表し得るものの、それをそのままの形で言語的に表出させることは許されない。したがって、可算名詞を用いて総称的表現を行うためには、冠詞を付加するなど、何らかの形式的操作が必要となる。

一方、物質名詞は無冠詞のまま使用することができる。物質名詞は空間的・時間的領域などの下位領域において区分化を受けず、そのような領域上で対象概念をプロファイルすることがデフォルトとなっていない。そこで、より上位の階層に属するタイプ要素を指示対象として取ることが可能であり、結果的に、一種の総称的名詞表現として機能することになる。例えば次の (14a) および (14b)

で、無冠詞の物質名詞である water, bread, flourは、それぞれ総称的な意味を持っている。

- (14) a. *Water is a basic necessity of life.*
 b. *Bread is made from flour.*

以上のように、可算名詞と物質名詞とでは、その内部構造が異なっており、可算名詞単数形は無冠詞では基本的に使用できないのに対して、物質名詞は無冠詞のまま使用でき、しかもそれがそのまま総称的意味を持ち得る。⁴ それでは、可算名詞単数形が定冠詞と結合し、the NPという形式をとったときに生じる総称的意味の背景にはどのような認知的構造が存在しているのだろうか。この問題について次に考察する。

3.3. 定冠詞による総称的名詞表現の概念構造

可算名詞単数形は、定冠詞と結合することによって総称的意味を表すことができる。このことについては、3.1で確認した定冠詞の意味構造が持つ特徴と、3.2で確認した可算名詞の意味構造が持つ特徴とを重ね合わせて考えることによって基本的な説明を得ることができる。

しかし、定冠詞と可算名詞単数形とが結合することによって形成される名詞句は、必ずしも総称的意味を持つわけではなく、単に個別的・具体的な対象を特定の指示する表現となることもある。したがって、the NPという形式を持った名詞

句は、大きく分けて、次の (15a) および (15b) によって表されるような、2種類の用法を持つと言える。

- (15) a. *The Labrador retriever makes a great pet.*
- b. *She fell in love with the Labrador retriever the moment she found him at the pet shop.*

とはいえ、これら2種類の用法の概念構造は完全に異なっているわけではない。むしろ多くの部分については共通しているが、細部の違いにより、結果的に異なった用法として現れてくるのだと考

えられる。以下では、the NPという形式を持った名詞句から総称の意味が生じる際の認知プロセスと、同じ形式を持った名詞句から非総称の意味が生じる際の認知プロセスとについて、認知図式を用いた分析を試みる。

まず、(15a) のthe Labrador retrieverのように総称の意味を表すthe NPの概念構造は、次の図4に示されるようなプロセスにより形成されると考えられる。右下の四角形は可算名詞を構成要素に持つNPを表している。これは基本的に図(3a)と同じものである。ただし、ここでは、より上位の要素も含めて図式化している。次に、左下の四角形は定冠詞theの概念構造を表している。ここには、タイプ要素とそのインスタンスが描か

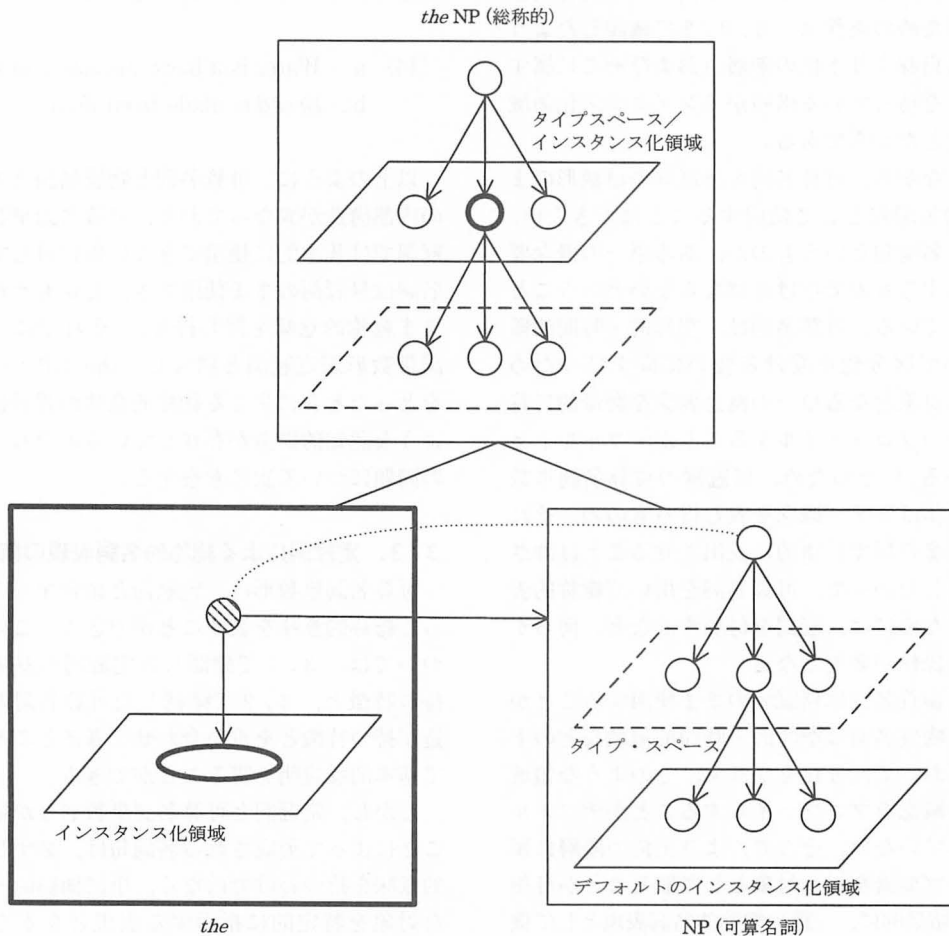


図4

れている。インスタンスとして指定された要素が単一でしかも大きく描かれているのは、この要素が唯一かつ最大のものであることを表している。3.1でみた定冠詞の認知的特徴がそのまま図式化されていると考えてよい。また、インスタンス要素は太線で描かれており、プロフィールが上位のタイプ要素ではなくインスタンス要素に与えられることが示されている。

これら2つの概念構造が結合することにより形成されるのが図4上段の概念構造である。theの概念構造中のタイプ要素はNPの概念構造における最上位のタイプ要素によって具体化を受ける。そして、この結合プロセスにおいては、定冠詞がプロフィール決定詞 (profile determiner) とな

る。そこで、the NPの概念構造中では、可算名詞がもともと持っている下位領域における区分化への傾向にもかかわらず、プロフィール決定詞であるtheの強い指定によって、より上位の要素に対しプロフィールが与えられる。3.2.2で確認したように、このようにタイプ・スペース上の要素にプロフィールが与えられることが、総称的意味を持つための条件であるから、その条件を満たした図4のthe NPは、総称的意味を表す名詞表現として機能することになる。⁵

次に、(15b) でみられるような、非総称的なthe NPが形成されるプロセスは、図5のように図式化できる。

図5はtheの概念構造中のタイプ要素を具体化

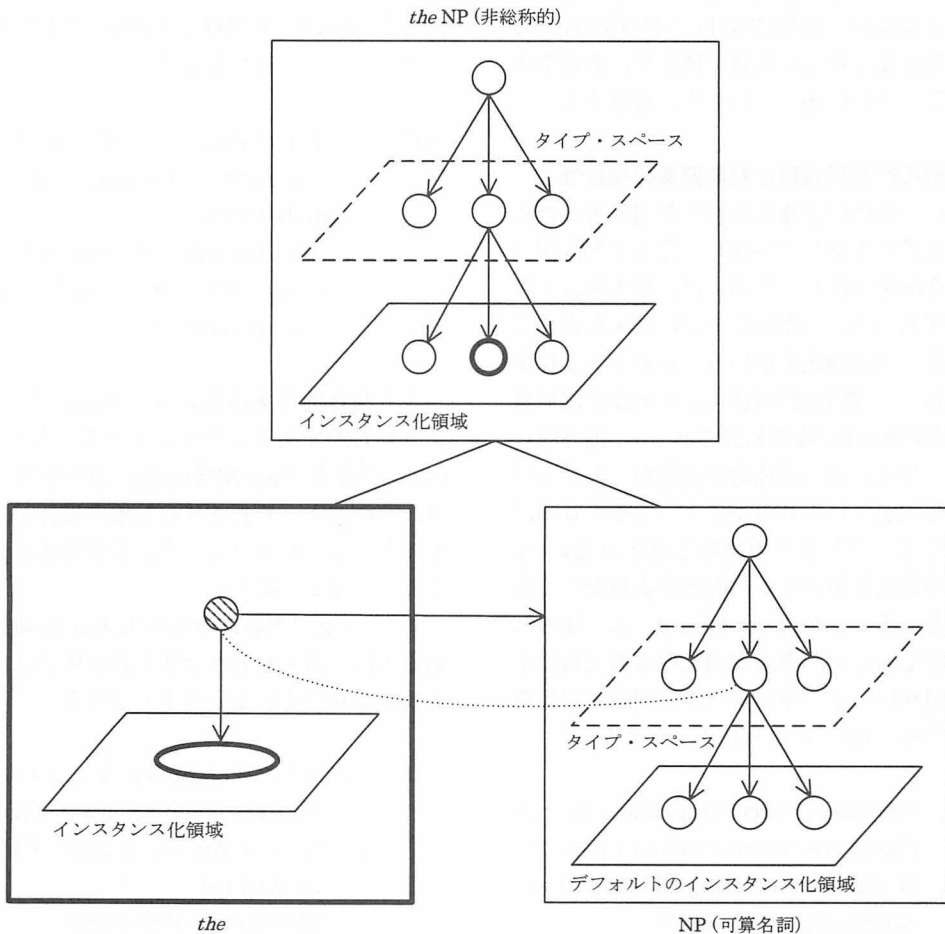


図5

する要素として、NPの概念構造中のどの要素が選択されるかという点において図4と異なる。ここでは、デフォルトのインスタンス化領域に対して一階層だけ上に位置するタイプ・スペース上の要素が選択されている。そのため、最終的に形成されるthe NPの意味構造では、下位の領域に属する具体的・個体的な要素にプロファイルが与えられる。⁶

このように、定冠詞と可算名詞単数形が結合して形成されたthe NPは、theの意味構造とNPの意味構造がどのように結合するかにより、総称的な表現になることも、非総称的な表現となることもある。いずれの様式で概念構造を結合させるかは、文脈における話者の意図に基づいて決定される。ただし、いかなる場合でも任意にthe NPという形式を用いて総称的な表現を行うことができるというわけではない。総称的なthe NPの使用には、表現の対象となる要素の性質に関して、ある条件が存在する。この問題について次に考察する。

3. 4. 総称的な名詞表現と対象要素の均質性

英語では、総称的な意味を持つ名詞表現のために専用の形式を用意していない。そこで名詞句に総称的な意味を持たせるためには、基本的に次の4つのいずれかの、「総称的でない意味を表すこともできる」言語形式を用いる。その4つとはすなわち、the + 可算名詞単数形、a + 可算名詞単数形、可算名詞複数形、物質名詞である(1節参照)。

しかし、ひと口に「総称的な名詞表現」と言っても、どの形式が用いられるかによってその意味は微妙に異なる。そしてこの微妙な意味の違いは、それぞれの形式を用いて総称的な名詞表現をつくる際の制限となることがある。例えば、よく知られていることであるが、不定冠詞を取る名詞句による総称表現を用いて、種のレベルに関する叙述を行うと、下の(16c)のように不適格となる⁷。

- (16) a. *The tiger* is becoming almost extinct.
 b. *Tigers* are becoming almost extinct.
 c. **A tiger* is becoming almost extinct.
 (Quirk et al. 1985 : 282)

同様に、定冠詞と可算名詞単数形による総称表現にも意味的な制限が存在する。theと結合することであらゆる可算名詞句が総称的な名詞表現として機能できるわけではない。the NPという形式が総称的な意味を持つためには、それによって表される対象の集合が均質ななものとして認知されることが必要である。例えば、上の(16a)では、the NPという形式でtigerという種に属する動物を総称的に表しているが、これは、tigerという語の表す要素が、個別的な詳細と実体を持ったそれぞれのトラ(あるいはその集合)としてではなく、均質な一概念としてみなされ得るからである。⁸

Chafe (1994 : 103) は、the NPという形式を用いて総称的な名詞表現をつくる際、対象概念の具体性が高いほど、自然な表現となりやすいということ指摘している。例えば、(17a)は一応、容認可能な文であるが、対象概念が具体的である分、(17b)のほうが、より自然な文に感じられるという。

- (17) a. *The elephant* will either stamp on you, if it wants to kill you, or pick you up in its trunk.
 b. *The African elephant* will either stamp on you, if it wants to kill you, or pick you up in its trunk.

より具体的であるということは、多くの場合、より均質であることを意味する。したがって、Chafeの論は、the NPが総称的な意味を持つためには、それによって表される対象の集合が均質なものとして認知されることが必要であるということでの仮説と一致する。

また、the NP形式の総称的な名詞表現を使ってある集団に属する人々全体を表す用法は、自然な表現になりにくいという事実がある。

- (18) a. ?*The Welshman* is a good singer.
 [Cf. *Welshmen* are good singers.]
 b. ?*The doctor* is well paid. [Cf. *Doctors* are well paid.]
 (Quirk et al. 1985 : 283)

これらの文が不自然に感じられるのは、「人々」という、本質的に多彩な性質を持つ対象を、均質的なひとまとまりの概念としてみなすことが非常に困難であるからと考えられる。「ウェールズ人」や「医者」のように、ある程度の具体性を持った限定的な集団であっても、それらの内の個別性を捨象することは、通常の文脈において、かなりの困難を伴うのである⁹。

以上の事実は、本稿で提示した総称的名詞表現としてのthe NPに関する仮説を強く裏付けるものとなる。総称的な意味を持つthe NPの指示対象は、名詞句のタイプ・スペース上の特定の要素を唯一的かつ最大限に捉えたものである。例えば、総称的表現としてのthe tigerは、tigerという語によって表される種に属する要素の最大範囲を指示する。この最大範囲は個体的要素の寄せ集めの集合ではなく、タイプ・スペースにおける単一概念要素を指向する。単一概念要素である以上、それは必然的に個体レベルにおける詳細や相違を捨象したものである。総称的表現とは、そのような細部の捨象によって実現されるものであり、それが可能となるためには、the NPの対象概念はある程度以上の具体性を持ったものでなければならない。このとき、具体性が低く、そのため均質的なものとしてみなすことが難しい要素を用いると、不適格とみなされることになる。¹⁰

4. むすび

本稿では定冠詞と可算名詞単数形とが結合して形成されるthe NP形式の総称的名詞表現に対する認知的分析を試みた。まず、認知的な基盤を持たない理論によっては、定冠詞の意味に関する問題を十分に説明できないことを論じた。次に、定冠詞という文法カテゴリーと名詞句の総称の意味が認知文法においてどのように定義されているかを確認し、それに基づいてthe NPという形式を持つ総称表現の概念構造を分析した。最後に、the NP形式による総称的名詞表現が可能であるためには表現される対象となる要素が均質的なものとしてみなされ得るものでなければならないという仮説を提示した。

総称的な意味を持つthe NPは、対象要素を言

語話者が心的世界において抽象化し、外部世界に存在する具体的で個別的な物的対象としてではなく、ひとつの概念として捉えることによって可能となる言語表現である。このような性質を持った言語現象を正確に分析するには、言語使用者の認知の構造に関する基本的理論が不可欠となる。本稿で用いた認知文法は、形式と意味との関係をわれわれ人間の基本的認知能力の観点から探っていくことを目的とした枠組みであり、総称的な意味を持つthe NPのような言語現象の分析には最も適切な文法理論である。本稿の考察では、あらためてこのことが示された。

注

- 1 認知的的方法論による定冠詞の研究としては他にRichard Epsteinによるものがある。Epstein (1996) では、「視点」(viewpoint) の概念に基づくアプローチによる、定冠詞の語用論的な問題についての興味深い考察が示されている。
- 2 ここで、要素A, B, Cはそれぞれ、哺乳動物・犬・ジョンの「概念」を表しており、それぞれの「語」を表しているわけではないということに注意されたい。なお、一般に、ある階層に属する概念を表す表現はそれより下位の階層の概念を表すために使用することができる。したがって、ジョンのことを指して「犬」ということも可能である。
- 3 可算名詞を数量的に特定化するということには、可算名詞の複数形化も含まれる。ただし、複数形の名詞句も概念的にはあくまで「単一の」概念要素を指示する。認知文法では可算名詞複数形を単に単数要素の集合とは扱っていない。複数形化された可算名詞は物質名詞に近い性質を持つ。詳細についてはLangacker (1990 : Ch. 3, 1991 : Ch. 2) を参照。
- 4 ただし、ある名詞が可算名詞としても物質名詞としても使用可能なことがある。例えば、wineという語は基本的に物質名詞だが、「ある種のワイン」という意味でa wineという表現を行うこともできる。これは、概念構造における主要認知領域の優先度のシフトという観点から説明することができる (Langacker 1990 : Ch. 3)。

5 本稿では紙面の制限により図4のようないわゆる認知図式の記述法についての完全な詳細を述べることはできない。Langacker (1990, 1991, 1999) を参照されたい。

6 可算名詞単数形にtheを付加することによって総称的名詞表現をつくることができるのに対して、物質名詞や可算名詞複数形にtheを付加すると、逆に本来の総称的意味が失われ、その名詞によって表される物質の下位クラスに対する総称表現、あるいは具体的・特定の指示表現として機能する。紙面の都合でここでは詳細に論じることができないが、このことも、図4や図5で示したものと平行的な認知プロセスとして説明できる。

7 (16c) が不適格な文であることの認知的な理由は以下の通りである。a/an NPという形式を持った名詞句は、タイプ・スペース上の要素ではなく、個別的・具体的な認知領域から取り出した任意の要素を指示する。そのため、a tigerという名詞句を用いて、典型的な一つの個体としてのtigerについて述べることはできるが、同じ表現を用いてtigerという語によって表される種全体について述べることはできない。

8 しばしばこのような概念は「プロトタイプ」(prototype) と呼ばれる。しかし、プロトタイプとは本来「あるクラスの構成要素の中で、そのクラスを代表する典型的・中心的なもの」である。したがって、ここでそのように呼ぶことは、必ずしも正しくない。

9 ただし、強く限定されたあるグループに属する人々の集団的な特徴を述べるような場合には、the NP形式による総称的名詞表現も自然なものになる場合がある (Quirk et al. 1985: 283)。

- (i) He spoke with the consummate assurance and charm of *the successful Harley Street surgeon*.
(Harley Streetは一流の医者が多く住んでいることで有名なLondonの一地区。)

10 Bowdle and Ward (1995) が指摘している

ように、this, that, these, thoseといった指示詞を用いた総称的名詞表現も存在する。指示詞は限定的な意味を持ったグラウンディング叙述詞であるという点で定冠詞と類似した構造を持っている。それゆえ、指示詞による総称的名詞表現においても、定冠詞の場合と同様、名詞句が示すクラスに属する要素は比較的均質でなければならない。

- (i) a. A: My roommate just bought a dog.
B: # *Those dogs* make great pets.
b. A: My roommate just bought a Labrador.
B: *Those Labradors* make great pets.
(ii) a. A: My roommate owns a laptop computer.
B: # *That laptop computer* is pretty versatile.
b. A: My roommate owns an IBM ThinkPad.
B: *That IBM ThinkPad* is pretty versatile.

上の例からわかるように、指示詞による総称表現を行うためには、dogやlaptop computerといった語が持つ程度の均質性の度合いではやや低すぎる(ここで#は認容度に揺れがあることの印)。LabradorやIBM ThinkPadといった、構成要素間の個体差が小さく、より具体的なイメージを想起できる語であれば問題ない。

参考文献

- Abbott, Barbara. 2001. "Definiteness and Identification in English," *Pragmatics in 2000: Selected Papers from the 7th International Pragmatics Conference*, Vol. 2, ed. by Nemeth T. Eniko, 1-15, Antwerp: International Pragmatics Association.
Birner, Betty J. and Gregory Ward. 1994. "Uniqueness, Familiarity, and the Definite Article in English," *Proceedings of the*

- Twentieth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 93 – 102.
- Bowdle, Brian and Gregory Ward. 1995. "Generic Demonstratives," *Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 32 – 43.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time : The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*, Chicago : The University of Chicago Press.
- Christophersen, Paul. 1939. *The Articles : A Study of Their Theory and Use in English*, Copenhagen : Munksgaard.
- Du Bois, John W. 1980. "Beyond Definiteness : The Trace of Identity in Discourse," *The Pear Stories : Cognitive, Cultural and Linguistic Aspects of Narrative Production*, ed. by Wallace Chafe, 203 – 275, Norwood : Ablex.
- Epstein, Richard. 1996. "Viewpoint and the Definite Article," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 99 – 112, Stanford : CSLI.
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg, and Ron Zacharski. 2001. "Cognitive Status and Definite Descriptions in English : Why Accommodation is Unnecessary," *English Language and Linguistics* 5, 273 – 295.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*, London : Longman.
- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness : A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, London : Croom Helm.
- Heim, Irene R. 1982. *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Kadmon, Nirit. 1990. "Uniqueness," *Linguistics and Philosophy* 13, 273 – 324.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol : The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin : Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2, *Descriptive Application*, Stanford : Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*, Berlin : Mouton de Gruyter.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London : Longman.
- Ward, Gregory and Betty J. Birner. 1995. "Definiteness and the English Existential," *Language* 71, 722 – 742.

A Cognitive Approach to the Generic Use of *the* NP

Yoichiro Hasebe

Summary

This paper introduces an approach based on the framework of Cognitive Grammar (Langacker 1990, 1991, 1999) to describe the semantic structure of *the* NP in the generic sense and to account for conditions under which a generic use of *the* NP can be considered

acceptable. The semantic structure of the generic use of *the* NP is different from that of *the* NP in its non-generic use. In the latter structure, a cognitive domain of concrete entities, such as the domain of physical space, is generally chosen as domain of instantiation, whereas in the former structure, a higher level of the stratum (type-space) is chosen as domain of instantiation. For the type-space to function as the domain of instantiation there is a requirement that the elements in that space are seen as homogenous to a certain extent, and how much this requirement is met determines the acceptability of actual usage of *the* NP in the generic sense.

The main part of the paper consists of two sections. In the first section, different kinds of uses and senses of the definite article are examined according to a categorization system presented in Halliday and Hasan (1976), in view of placing the generic use of *the* NP in the well-established system of categorization. In the second section, how Cognitive Grammar defines two concepts, the concept of definite article on one hand and the concept of genericness on the other, is considered. Then, the semantic structure of *the* NP in the generic sense and the restriction on its usage are investigated on the theoretical basis laid out in the earlier part of the discussion.